

日本・ポーランド関係話題集

平成23年10月
在ポーランド日本国大使館

両国の国交樹立は1919年に遡り、2009年は国交樹立90周年に当たる。両国民の交流の歴史は今から約100年以上前に遡り、様々な友好・親善のエピソードに彩られている。以下はその一部である。

1. 交流の始まりから第二次世界大戦まで

ポーランドの地を踏んだ最初の日本人

(1)ポーランドを始めて訪れた日本人は福島安正(1852年～1919年)少佐である。同少佐は、ベルリンからウラジオストックまでユーラシア大陸を488日間かけて単騎横断する途中の1892年2月、ポーランドを通過。記録によれば、福島少佐はポーランドにてロシア情報の収集を試みた。

(2)その際、福島少佐はポーランドに関し、以下の歌を詠んでいる。

「淋しき里にいでたれば ここはいずこと尋ねしに 聞くも哀れやその昔 亡ぼされたるポーランド」

「君が代」を通じた交流

(1)フランツ・エッケルト(Franz Eckert: 1852年4月5日～1916年8月6日)は、明治時代の日本で活躍した作曲家であり、プロイセン王国(現ポーランド領)シロンスク地方のノイローデ(現在のノヴァルダ)に生まれ、ブレスラウ(現ヴロツワフ)とドレスデンの音楽学校に学んだ。

(2)1879年に来日し、1880年、奥好義・林広季作曲、林広守撰定の『君が代』を編曲。以後、日本を離れるまで、海軍軍楽隊、音楽取調掛、宮内省式部職、陸軍戸山学校その他、洋楽教育機関の多くにかかわった。また、1897年には、英照皇太后の大喪の礼のために『哀の極』を作曲した。

(3)エッケルトと日本との関係が緊密だったことから、生地ノヴァルダでは、2006年から「日本文化の日」が毎年開催されるようになり、エッケルトの銅像が建立されている。

外交関係樹立前後の交流

(1)1919年3月22日、日本政府は、123年に亘る三国分割後に独立したポーランド国家及びイグナツィ・パデレフスキ政府を承認した。

(2)他方、両国間の交流は、1919年の国家承認以前より、主に軍事協力の分野で活発化していた。1904年3月には、日本軍諜報部将校明石元二郎がクラクフでロマン・ドモフスキ国民連盟代表と接触。また、ポーランド社会党も同時期に在ロンドン日本大使館と接触を開始する。同年5月にドモフスキ、7月にはユゼフ・ピウスツキといった当時のポーランド指導者が相次ぎ訪日した。(下記『日露戦争とユゼフ・ピウスツキ』項参照)。

(3)1919年6月、後の陸軍大将・山脇正隆(1886年～1974年)が日本参謀本部非公式代表としてワルシャワに駐在開始、1921年には初代公式武官に就任した。

日露戦争とユゼフ・ピウスツキ

(1)日露戦争勃発後の1904年7月、ユゼフ・ピウスツキ将軍(当時ポーランド社会党の指導者。第一次大戦後独立ポーランドの初代国家元首。1867年～1936年)は、シベリア

鉄道破壊など帝政ロシア軍に対する様々な工作をする代わりとして、日本政府からポーランド革命運動への援助を求めべく来日した。また、当時ロシアの支配下にあり帝政ロシア軍の一部として戦場で戦い捕虜(約4600人)となったポーランド人軍人への待遇改善を求めた。

(2)他方、右派の指導者ロマン・ドモフスキ(1864年～1939年)は、ピウスツキの武力による対ロシア蜂起の動きがポーランドにとって不利益になると考え、訪日時にロシアの革命家や少数民族に対する資金や武器弾薬の供給といった援助をやめるよう日本政府に求めた。結局、2つの異なる意見のため、明治政府は、ピウスツキの提案のうち、対ロシア軍工作、ポーランド革命運動への援助には応じなかったが、日露戦争で捕虜となったポーランド人軍人に対する特別待遇の要請(注:ドモフスキも同様に要請)には快く応じ、松山市内の15か所に設置(1904年3月)された収容施設において、1906年2月の閉所までポーランド人捕虜を手厚く待遇した。

(3)1928年3月、ピウスツキ元帥の提案により、在日ポーランド共和国武官であるヴァツワフ・イエンジェイェヴィッチが、日露戦争で功績を残した日本軍将校へ勲章を叙勲。帝政ロシアを破った日本人に対するポーランド人の好感情は今日まで続いている。

ブロニスワフ・ピウスツキ(1866年～1918年)と二葉亭四迷

(1)ユゼフ・ピウスツキ將軍の兄ブロニスワフは、1887年20歳のとき、ロシア皇帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件に関与したとして樺太流刑に処された。刑期終了後の1896年、南樺太コルサコフ(大泊)の測候所に勤務したブロニスワフは、樺太アイヌ民族に接し、本格的にアイヌ研究を始めた。その後アイヌ部族の酋長の娘と結婚、二児をもうけた。ブロニスワフは樺太アイヌの伝承の語りを蠟管に録音していたが、1980年にポーランドで発見されたこの蠟管は北海道大学で再生に成功し、アイヌ民族の言語・習俗の研究の進展に大きく貢献した。

(2)日露戦争勃発後、ブロニスワフは樺太経由で1906年日本を訪問し、当時ロシア革命派に関心を寄せていた二葉亭四迷のもとを訪れた。8カ月の日本滞在中、ブロニスワフと二葉亭四迷は親密な間柄となり、二葉亭四迷は彼に物心両面で援助を与え、大隈重信、板垣退助をはじめ多くの著名人に引き合わせた。また、ブロニスワフは日本文学にも大きな関心を示し、二葉亭四迷とともに日本・ポーランド協会を設立、両国文学の翻訳、紹介活動を積極的に行った。

ポーランド人シベリア孤児(後述「阪神・淡路大震災児童のポーランドへの招待」参照)

(1)1920年代初頭、ロシア革命直後の混乱の中で親を失ったシベリアのポーランド人孤児達(政治犯等で流刑となっていたポーランド人の子弟)は、飢餓と疫病の中で悲惨な状態にあった。これら765名のシベリア孤児(1～16歳)を1920年と1922年の2度にわたり日本政府・日本赤十字が受け入れ、その後祖国ポーランドに移送した。この支援の動きは、日本赤十字の外国に対する最初の活動。

(2)2002年の天皇皇后両陛下のポーランドご訪問時に、天皇皇后両陛下は存命するシベリア孤児と会見された。

(3)ワルシャワには現在、シベリア残留孤児としてマリア・オルスウェイン氏(94歳)が存命である。(注:シベリアで両親と離れ、一人収容され、ポーランドに移送された後にワルシャワで両親と再会。田邊大使が往訪して懇談した際、日本の人々に優しく面倒を見てもらったこと、そのおかげで人生をこのように生きることができ、日本に大変感謝していると述べ、日本滞在中に覚えた「もしもしかめよ」の歌の冒頭部分を歌って聞かせてくれた。)

喜波貞子(きわていこ)と日本人形

(1)1925年、日本人の血を4分の1ひくオランダ国籍のオペラ歌手、喜波貞子がワルシャワの国立劇場で「蝶々夫人」の主演を演じた。貞子演ずる「蝶々夫人」はポーランド人観客に大好評で、それから毎年のようにワルシャワで公演が行われた。

(2)彼女の熱烈なファンであった若い美容師カミラ・ジュコフスカは、貞子がワルシャワで「蝶々夫人」を上演する度に劇場に通いつめた。カミラは日本文化に大変興味を持ち、着物や扇子その他の小物を集め、自分の髪が日本人のように黒かったことを誇りに思っていた。後にナチス・ドイツの占領時代、カミラは反独レジスタンス組織に所属していたことが発覚し、ワルシャワ市内のパヴィアク監獄に収容された。死が近い事を悟ったカミラは、生きた証として、そして死の恐怖を紛らわせるために大好きな喜波貞子をモデルに日本人形を制作することを決意した。材料は、身分を偽り看守を務めているレジスタンス活動家が服の襟に縫い付けて何とか運び入れた。人形が完成すると、カミラは家族宛の手紙で「テイコ・キワ」と名づけるように依頼した。1942年5月22日、カミラはワルシャワ郊外の森に連行され射殺された。カミラの姪である人形の持ち主は、音の響きをポーランド女性風にするため「テイコ」から「タイカ」に変え、大切に自宅に保管していたが、1976年に博物館となっていたパヴィアク刑務所に人形を提供し、同場所で展示されるようになった。

航空交流

1926年9月5日にポーランドより初めての飛行機が日本に到着した。操縦士はボレスワフ・オルリンスキ、機関士はレオナルド・クビアクであった。8月27日にワルシャワを出発し、モスクワ、オムスク、ハルビン等を経由して所沢に到着した。日本到着後は市民より大歓迎を受け、ラジオのインタビューを受けるなど大きく注目された。これを記念して勲章が授与された。9月12日には所沢を出発し、途中飛行機が故障するなどトラブルに見舞われたが、9月26日無事ワルシャワへ帰還した。

コルベ神父とゼノ修道士

(1)1931年から1935年まで長崎で伝道活動を行ったマクシミリアン・コルベ神父(1894年～1941年)は、ポーランドに帰国後、第二次大戦中にオシフィエンチム(アウシュヴィッツ)の強制収容所に収容された。1941年、突然死刑を命じられ、妻と子供に会いたいと嘆き悲しむ同房の処刑予定者の身代わりを申し出て処刑された。

(2)コルベ神父と共に1930年に渡日したゼノン・ジェブロフスキ(ゼノ修道士、1891年～1982年)は、宣教活動や奉仕活動を行った。1945年8月に長崎に原爆が投下され、本人も被爆したにもかかわらず、被爆者や戦争で全てを失った人々のために、慈善活動を続けた。1950年頃からは戦争で被害を受けた人々などが住む集落「アリの街」に赴き、集めた寄付や救援物資を分け与えるなどした。また1962年には広島市福山市沼隈町に知的障害者のための施設も建設した。このような活動を評価し、日本政府は勲四等瑞宝賞の叙勲を行った。ゼノ修道士は1982年に亡くなるまでの約50年間日本での慈善活動を続けた。

(3)なお、ゼノ修道士生誕地チャルニア村では、2006年10月には小学校、2008年4月には特別養護学校にゼノ修道士の名前が冠された。

戦間期から戦時中に亘る軍事協力

(1)日本陸軍当局は、戦間期にてソ連軍の暗号解読を主目的にした暗号術の講習をポーランドの専門家に依頼、軍事協力を活発化させた。1923年には、ポーランド参謀本部暗

号解説学専門家のヤン・コヴァレフスキ少佐が、東京の参謀本部にて3か月に亘る講習を実施。

(2) 第二次世界大戦中、国交断絶にも拘わらず両国間の情報協力は継続(在カウナス日本領事館の杉原領事代理の活動及び在スウェーデン日本大使館付武官小野寺信大佐とポーランド参謀本部第二部将校ミハウ・リビコフスキ少佐との協力)。

杉原千畝領事代理による「命のビザ」発給

(1) 第2次世界大戦中の1940年、リトアニアの首都カウナス(当時)で日本領事館の領事代理であった杉原千畝氏(1900年～1986年)が、多くのユダヤ系ポーランド人等に日本通過査証を発給。その結果、ナチスの迫害に遭った多くのユダヤ人が日本経由でアメリカ等第三国に脱出することができた。

(2) ポーランド政府は、杉原氏の人道的功績を称え、1996年に「功労勲章勲爵士十字章」を授与した。また2007年には、カチンスキ大統領は、第二次世界大戦時のナチス占領下のポーランドにて勇敢にユダヤ人を救ったポーランド人及び外国人計53名に叙勲を授与。その際、杉原氏に1996年の勲章より上位の「ポーランド再生勲章勲爵士星付十字章」を授与した。

2. 第二次世界大戦から今日に至るまで

戦後の外交関係回復

1941年10月4日に日本政府が在ポーランド大使館の閉鎖を発表し、同年12月11日にポーランドが日本に宣戦布告して以降断絶された外交関係は、1957年2月8日、日本はポーランドと「国交回復に関する協定」(同年5月発効)をもって回復した。

連帯運動と日本

1980年以降のポーランドにおける労組「連帯」の一連の活動は有名な話であるが、「連帯」は様々なレベルで日本との関わりを持っていた。1980年8月労働者と政府の間で政労合意書が署名されると、同年9月日本の労働団体の一つである同盟の田中良一書記長がワルシャワを訪問した。また11月には総評の富塚三夫事務局長が専門家とともにポーランドを訪問し、80年のストライキ時に「ポーランドを第二の日本に」との発言を行ったワレサ氏(後に大統領に就任。1983年のノーベル平和賞受賞者)を始めとする連帯の関係者と会合を持った。富塚事務局長は「連帯」との緊密な関係を希望し、同時に様々な支援を行う準備があることを表明した。翌年1981年春、ワレサ氏をはじめとする「連帯」の代表団は日本を訪問し、日本の労働団体、衆参両院議員、文化人、メディアとの会合を持った。

ヴロツワフの日本庭園

(1) ポーランド南西部ヴロツワフ市内のシチトニツキ公園の一角に、日本庭園がある。1913年、当時ドイツ領だったヴロツワフで、ナポレオン戦勝100周年記念として万国博が開催され、その一環として催された庭園芸術展のため、ホッフベルグ伯爵が日本人庭師アイ・マンキチ氏と共にこの日本庭園を造成したという記録が残っている。シチトニツキ公園の庭師たちは数少ない古ぼけた日本庭園の写真を頼りに何とか庭園を手入れしていた。

(2) ヴロツワフ市の要請により1995年にJICA短期専門家派遣スキームで派遣された「造園設計」専門家は、庭園の修復は可能であるという調査結果を出した。他方、民間レベルでも、同市からの要請に応え、愛知県造園協会関係者らが日本庭園修復に協力し、1997年にこの修復事業が完了、「白紅園」として開園した。政府レベルでは、1995年から9

9年の間に計7名の専門家が派遣され、民間レベルでも15名が日本庭園の修復に協力した。完成直後の洪水で庭園の一部が流されたが、再度日本の協力により修復され、現在では市民の憩いの場となっている。

ポーランドの日本研究・日本語教育

(1)ポーランドでは19世紀末から20世紀初頭にかけて、西欧経由で紹介された日本文化が文学界や美術界において流行し、日露戦争等も相まってポーランド人の日本への関心が高まった。1919年にはワルシャワ大学に日本語講座が開設された。1926年より第二次世界大戦前までワルシャワ大学で教鞭を取っていた梅田良忠氏は、ポーランドにおいて、最初の日本語講師として知られている。

(2)1956年、ワルシャワ大学中国学科に日本学科が併設された。1987年にはポズナンのアダム・ミツキェヴィチ大学とクラクフのヤギエウォ大学に日本学科が設立された。2008年には新たにトルンのコペルニクス大学に日本学科が設立され、現在4つの国立大学に日本学科が存在しているほか、私立大学でも多くの日本学科が設立され、大学での日本語教育は高い人気を誇っている。その一例として、2006年のワルシャワ大学日本学科の倍率は30.25倍となり、これは全ての大学の学科における最高倍率だったことが挙げられる。

(3)1989年の体制転換以降は、大学だけでなく、青年海外協力隊員の日本語教師、民間レベルでの日本語教師派遣、日本美術技術博物館(マンガ・センター)での日本語の授業などを通じ日本語を学習する機会が増えている。2008年の時点において、ポーランドでは63の日本語教育機関において、約3000人が日本語を学習している。さらに2009年1月から、日本文化発信プログラムにより6名のボランティアがポーランド各地に派遣され、日本語普及等の活動が行われている。また、インターネットを通じた日本研究・日本語学習も人気を集めており、日本に関する掲示板等が着実に増え、意見交換・教育の場を提供している

(4)2004年より、日本語能力試験がワルシャワで実施されるようになり、受験者総数が2004年の83名から2008年の348名へと4倍以上増加していることから日本語教育に対する関心の高さが窺われる。

日本美術・技術博物館(マンガ・センター)

(1)1994年11月、ポーランドの古都クラクフ市のヴィスワ川のほとりに「日本美術・技術センター」が誕生した。このセンター誕生のイニシアティブをとったのは、「灰とダイヤモンド」、「大理石の男」等の作品で知られる世界的映画監督アンジェイ・ワイダ氏。戦時中、画家を目指していたワイダ少年はクラクフ織物会館で見た浮世絵に強い感銘を受け、熱心な日本美術収集家であったフェリックス・ヤシェンスキ(1861年～1929年)のコレクションを展示する美術館をつくる夢を持つことになった。

(2)1987年、京都賞を受賞したワイダ監督は、賞金副賞4000万円全額を費やして青年時代の夢の実現に取りかかった。ワイダ監督が街中での募金活動を自ら行い、同監督の熱意に心を打たれたポーランド及び日本両国総計13万人以上に上る人々が美術館建設寄付に貢献し、また日本政府及び民間企業の出資もあり(日本政府出資41%、企業等支援59%、合計約564万USDドル)、94年の開館にこぎつけた。美術館の名称は、日本の美術とともにその背景にある日本の技術も紹介したいとのワイダ監督の思いから、「美術・技術」センターの名称が用いられた。なお、同美術館は、ポストモダンの代表的な建築家

である磯崎新氏が設計している。

(3)同博物館は、葛飾北斎の北斎漫画に因んで「MANGGHA」の雅号を名乗ったヤシエンスキに因み「マンガ・センター」という愛称で呼ばれ、欧州有数の浮世絵コレクション(約4600枚)や日本語講座、茶道教室を中心に様々な日本文化紹介活動の普及にも貢献している。また、2005年以降は、各種日系企業による先端技術展示も行われている。2007年、日本美術・技術センターは、「日本美術・技術博物館」となった。

阪神・淡路大震災被災児童のポーランドへの招待

(1)日本とポーランドの市民交流を熱心に行ってきたフィリペック氏(1995年当時:在京ポーランド大使館商務参事官、現在:ポーランド科学アカデミー教授)は、「日本・ポーランド親善委員会」を立ち上げ、1995年7月と8月、1996年7月と8月に阪神・淡路大震災被災児童(両年合わせて約50名)をポーランドに招待した。この招待は震災で傷ついた児童の心を癒すということが目的であり、ポーランド各地方自治体等の協力を得て地域との交流イベント開催やホームステイの実施など友好親善活動を促進した。また1920年と1922年の2度にわたり日本がシベリアで救出したポーランド人孤児との会合をアレンジするなど、日本とポーランドの市民交流に非常に積極的な役割を果たした。

(2)2005年8月、10年ぶりに、成長した被災児童をフィリペック氏が招待し、「心から心へ」というテーマで阪神大震災被災児童写真展をワルシャワで開催した。また、同時にプウォツク少年少女舞踊合唱団の演奏、またポーランド人孤児の協力・出席を得て同合唱団員との交流が行われた。2006年、日本政府は、同氏の日本・ポーランド学術交流の推進及び友好親善活動を評価し、旭日中綬章の叙勲を行った。

ポーランド日本情報工科大学と日本の支援

(1)ワルシャワの中心地に大きな日本語の看板がある。この看板は、ポーランドでもトップクラスの情報工科大学の看板である。市場経済移行後のポーランドは、産業の生産性・効率性の向上を目指してコンピュータ・システムの導入を積極的に進め、実践的な情報工学分野の人材育成を行うことが急務であった。このため、1993年ポーランド政府は我が国に対し、実践的コンピュータ技術教育を行う「ポーランド日本情報工科大学」の設立及び教育プログラム開発に対する支援を要請してきた。

(2)これに対し我が国は、1994年から2000年までの間、累計312万米ドルの資金協力、国際協力機構(JICA)の専門家派遣累計75名、日本での研修員受入れ17名、機材供与約416万米ドル等の支援を行った

(3)その後、同大学は、1999年から2006年度まで第三国研修として対象国をバルカン諸国まで拡大した「情報工学セミナー」を実施(累計155名受講)する等地域教育拠点となっている。更に我が国の支援によるUNDPとの協力の下、ウクライナのキエフ工科大及びリヴィウ工科大に遠隔教育施設を開設。またポーランドODA活用し同様な施設を同じくウクライナのオデッサ工科大学(2006年)、国立ハリコフラジオ電子工学大学(2007年)設立し、ベトナムの5大学(2007年)に対しても支援を実施するなど独自の発展を遂げている。(

4)同大学は1994年10月に学生数わずか90名で開校したが、日・ポーランド双方の協力により急速に発展し、2009年1月現在、学生数2,600名を超えており、この分野でのトップクラスな大学となっている。また、近年の発展も目覚ましく、2つの分校(ピトム及びグダンスク)と高校も開講された。2007年には日本文化学部も開設され、当地における日本語及び日本文化の普及に貢献している。

ポーランド日本省エネルギーセンターと日本の支援

(1) 2001年、ポーランド政府は日本政府に対し、産業界のエネルギー効率の向上を図るために、省エネ分野で最も優れた経験を有する日本の協力を要請した。この要請に応じて、国際協力機構(JICA)が中心となり、2004年7月、ポーランド日本省エネルギーセンター・プロジェクトが開始され、2008年6月までの間に、長期専門家4名、短期専門家19名を派遣し、ポーランド側カウンターパート10名を我が国に受け入れた。

(2) また、ワルシャワ工科大学内に設置された同センターに、日本政府は総額1億円相当の訓練機材を供与した。同センターは、欧州で唯一、省エネルギーに関するトレーニングユニットを有し、実践的な研修ができる施設であり、ポーランド国内に止まらず、ウズベキスタン、ウクライナ、ロシアからの参加者を含む618名以上が同センターの研修やセミナーに参加した。2008年6月には我が国の技術協力は終了したが、省エネの重要性が高まる中、今後の同センターの活動の更なる発展が期待される。

天皇皇后両陛下ポーランドご訪問

(1) 天皇皇后両陛下は、2002年7月9日から13日まで、両国の友好親善を深めるためにポーランドをご訪問された。

(2) 天皇皇后両陛下は、ワルシャワで無名戦士の墓に献花されたほか、ポーランド大統領夫妻をはじめ、政府、文化・学術関係者と御会見された。また、王宮や旧市街、コンスタンチンの訓練リハビリセンター等をご訪問された他、ワジェンキ公園のショパン像の下でコンサートをお聴きになられた。

(3) 古都クラクフでは、ヤギェウォ大学にて文化界の代表と御会見されるとともに、日本美術・技術センター(当時)をご訪問された。

(4) また、1920年から22年に日本赤十字の支援によりポーランドへ帰還したシベリア孤児3名と御会見される機会があった。

日本の民間投資

(1) 1960年代後半から70年代にかけて、日本から総合商社が進出してきたが、社会主義体制下での経済関係は非常に限られたものであった。1989年の体制転換後に日本の販売関係企業が徐々に進出し、94年に松下電器(現パナソニック)が製造業として初めて進出した。

(2) ポーランドのEU加盟(2004年5月)以降は、日本企業の投資が急速に拡大しており、2009年1月現在、70を超える工場を含め、約230社の日系企業がポーランドで活動し、ポーランド経済の発展、雇用、及び輸出増加に大きく貢献している。最も顕著な進出分野は、自動車関連産業(エンジン、タイヤ、自動車部品)と電機産業(液晶テレビ関連等)である。多くの工場は経済特別区で操業している。2006年までのポーランドに対する日本の累積投資総額は約16億ドル(約1600億円、ポーランド経済省発表)である。二国間の輸出入は順調に伸びており、2001年から2007年にかけて貿易総額は約5倍増加した(2001年から2007年の貿易総額は約20億ドル(約2000億円))。

音楽コンクールと日本人

(1) 5年に一度ワルシャワで開催されるショパン国際ピアノコンクールは、1927年から開催されている世界で最も権威あるピアノコンクールで、若く才能あるピアニストたちの登竜門になっており、日本人も多数参加している。日本人の初参加は1937年に開催された第3回で、原智恵子氏が15位に入選した。初入賞者となったのは、田中稀代子氏(1955年

の第5回、10位)。現在までの日本人最高位は内田光子氏(1970年の第8回、2位)。また、中村紘子氏、小山実稚恵氏、横山幸雄氏等が入賞した他、2005年のコンクールでは関本昌平氏、山本貴志氏の二人が4位に入賞した。2010年は ショパン生誕200周年にあたり、コンクールに加えて数多くの音楽行事が計画されている。

(2) 1935年から開催されているヴァイオリンのヴィニアフスキ国際コンクール(ポズナン)も有名で、漆原啓子さん(1981年優勝)、石川静氏(1972年2位)をはじめ多くの日本人ヴァイオリニストが入賞している。特に1981年に開催された第8回は、3位を除き入賞者全員が日本人だった。

(3) 1979年よりカトヴィツェで開催されている「フィテルベルグ国際指揮者コンクール」も有名なコンクールの一つであるが、1983年に開催された同コンクールでは今村能(ちから)氏、1991年では末廣誠氏が優勝した。

両国間のスポーツ交流

(1) ポーランドにおける日本の伝統武道に対する関心は非常に高く、柔道、空手、合気道、相撲、剣道等の武道団体が活発な活動を行っている。日本武道の練習に励んでいる人も多く、2008年時点で柔道は約5000名、空手は約6万名、相撲は約1200名、剣道は約600名、合気道は約1500名となっている。毎年、ポーランド各地では様々な武道大会が開催されている。

(2) ポーランド出身の武道選手は国内のみならず国外においても活躍し、五輪、世界選手権大会、ヨーロッパ選手権大会等で多くのメダルを獲得している。この中で特に注目されたのは、1996年のアトランタオリンピックで柔道金メダルを獲得したナストウラ選手(総合格闘技 K-1 においても活躍)、2001年及び2002年のアマチュア相撲選手権大会で優勝したパチクフ選手等である。

(3) このような高い関心や活発な活動に鑑み、日本政府は草の根文化無償として2006年にポーランド相撲協会及びポーランド伝統空手連盟に対し、それぞれ、約550万円及び約810万円相当のスポーツ器材を供与している。

(4) 2009年10月にはウヅジ県プシェドブジュ市に道場「古村」が開設される予定となっており、約60ヘクタールの広大な敷地に、武道館、宿泊施設、茶室等の日本文化関連施設が建設され、柔道、空手、弓道など様々な日本武道の試合、練習を行うことのできる総合的なトレーニングセンターとなることが期待されている。

各地で開催されるジャパン・デー

(1) 市民レベルにおいても、日本・日本文化に対する関心は高く、ポーランド各地で「日本の日」、「日本文化週間」等、日本文化関連行事が開催されている。このような草の根レベルの活動に対しても日本大使館は、講師の派遣、後援名義の付与等により積極的に協力している。

(2) 2008年、「ジャパン・デー」に関する事業は全国で15件以上開催され、約7万人が参加している。これらの事業は、ポーランド人に日本文化を紹介するのみならず、日本人とポーランド人の交流の場となっており、文化交流・相互理解促進のために重要な役割を果たしている。日・ポーランド国交樹立90周年に当たる2009年には、引き続きこのような市民レベルの文化交流が活発に行われる予定である。

【出典】

◎兵藤長雄 『善意の架け橋』 文藝春秋 1988年。

- ◎阪東宏『ポーランド人と日露戦争』青木書店 1995年。
- ◎『ショパン ポーランド・日本典』1999年。

(了
)